

K-749

# 菅沢古墳二号墳

## 発掘調査報告書

1987

山形市教育委員会

# 菅沢古墳二号墳

## 発掘調査報告書

1987

山形市教育委員会



## 序

菅沢古墳二号墳（山形県指定史跡）は、大字菅沢地内の丘陵に位置し、一号墳及び三号墳とともに菅沢山古墳群（山形市指定史跡）を形成しています。

すでに衆知のとおり、この古墳は埴輪の出土する古墳として知られ、昭和43年に実施された山形大学教育学部による部分調査と埴輪収集によって広く注目を集めるようになりました。

教育委員会ではこうした状況を踏まえ、史跡の恒久的保全・保護の立場にたって、この古墳の復原整備を図るべく昭和60年度から発掘調査を実施してまいりました。

今回の発掘調査は、古墳の形状復原を目的とし、築造当時の姿を明らかにするために行われたもので、ほぼその目的を達成することができましたが、発掘中に出土した埴輪片の整理分析などは今後の作業となります。

この報告書の発刊に当たり、2カ年の長い期間、ご指導とご協力をいただきました本市文化財保護委員の柏倉亮吉先生、武田好吉先生、相田俊雄先生をはじめ加藤稔先生、阿子島功先生、川崎利夫先生、さらには山形県教育庁文化課に深甚なる謝意を表します。また、発掘作業をして下さいました地元菅沢地区的皆さんに厚く御礼申しあげます。

昭和62年3月

山形市教育委員会

教育長 軽 部 晋四郎



## 例　　言

- 1 本書は山形県指定史跡「菅沢古墳二号墳」の復原整備を実施するにあたり、古墳築造当時の姿を明らかにする目的で、山形市教育委員会が昭和60年度・61年度に実施した「菅沢古墳二号墳」の発掘調査報告書である。
- 2 本古墳は、「山形県遺跡地図」(昭和53年)に遺跡番号112番「菅沢古墳群」として登録されている。その所在地は山形県山形市大字菅沢字山崎である。
- 3 発掘調査は、昭和60年度が昭和60年10月14日から61年3月30日まで延60日間、昭和61年度が昭和61年4月1日から同年7月14日まで延70日間で実施した。
- 4 発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形市教育委員会

調査担当 山形市教育委員会社会教育課

調査担当者 江川 隆(山形市教育委員会社会教育課文化係主事)

調査指導者 柏倉 亮吉(山形市文化財保護委員)

武田 好吉(同)

相田 俊雄(同)

阿子島 功(山形大学教育学部助教授)

加藤 稔(山形県立博物館主任学芸員)

川崎 利夫(天童市立津山小学校教諭)

茨木 光裕(日本考古学协会会员)

事務局 山形市教育委員会社会教育課

なお、阿子島 功、加藤 稔、川崎利夫、茨木光裕の各氏からは、昭和61年度について指導をいただいた。

- 5 発掘調査にあたっては、山形県教育委員会文化課・山形県立博物館・山形大学教育学部歴史学研究会・山形市菅沢地区の方々など関係機関ならびに地元の協力が得られた。記して深く感謝申しあげる次第である。

- 6 本報告書の作成にあたっては、茨木・阿子島(I章)、江川(II章)、阿子島・加藤・江川(III章)、加藤・江川(IV章)が担当執筆した。また、編集は柏倉・阿子島・加藤・江川が担当した。

- 7 調査期間中、多数の方々の来跡を受け御教授を得たことを記して深く感謝の意を表す。

# 目 次

I 菅沢古墳の歴史的・自然的環境	
1 歴史的環境	1
2 自然的環境	3
II 調査の概要	
1 調査の目的	4
2 調査の方法	6
3 調査の経過	7
III 調査の成果	
1 墳形と規模	8
2 周溝	9
3 築成方法	9
4 下段上面(いわゆるテラス)	13
5 主体部	13
6 墓輪の配置	17
IV 考察と結び	
1 今回の調査のまとめ	19
2 残された課題	22

## 図版目次

図版 1 菅沢古墳群航空写真	図版 8 北トレンチ土層断面
図版 2 菅沢古墳群遠景	図版 9 西側周溝部
図版 3 二号墳近景ほか	図版10 二号墳主体部
図版 4 三号墳遠景ほか	図版11 二号墳主体部
図版 5 東トレンチ土層断面ほか	図版12 東南墳麓部埴輪出土状況
図版 6 西トレンチ土層断面ほか	図版13 東南墳麓部形象埴輪出土状況
図版 7 南トレンチ土層断面ほか	図版14 東北側テラス埴輪設置部ほか

## 挿図目次

- 第1図 菅沢古墳群位置図及び山形盆地  
の古墳分布図……………2
- 第2図 菅沢古墳群とその周辺の  
地形図…3
- 第3図 従前の菅沢古墳群調査図………5
- 第4図 菅沢二号墳の西側周溝断面図…9
- 第5図 菅沢二号墳の築成過程概念図…11
- 第6図 菅沢二号墳の東側トレンチ  
北側壁の築成…11
- 第7図 菅沢二号墳の東北側下段上面の  
埴輪配置図…17
- 第8図 菅沢二号墳の東南墳麓部の埴輪  
出土状況図…18

## 表 目 次

- 第1表 東北地方の大型円墳……………8
- 第2表 菅沢二号墳の築成高度……………12
- 第3表 山形県内の古墳にみられた  
木棺集成…15
- 第4表 従前調査結果と  
今次調査結果の比較…20

## 附 図

- 附図-1 菅沢古墳群全体図
- 附図-2 調査グリッド配置図
- 附図-3 a 菅沢二号墳東トレンチ北壁の土  
相
- b 西トレンチ北壁の土相
- c 東トレンチ北壁の墳頂部の版築  
層の土相
- 附図-3 d 菅沢二号墳北トレンチ西壁の土  
相
- e 南トレンチ西壁の土相
- f 墳頂G-8トレンチ展開図
- g トレンチ・グリッド配置図
- h 築成土量推定のための等高線図
- 附図-4 H-7トレンチ(主体部)の展開  
図



# I 菅沢古墳の歴史的・自然的環境

## 1 歴史的環境

山形盆地南西端の須川左岸の地域は、縄文時代から奈良・平安時代にわたる各時期の遺跡が密な分布を示す。この地域の西側は、山形盆地の南西縁を区画する白鷹丘陵が南北に連なり、そこから流下する本沢川・戸神川・山王川などの中小河川が丘陵から平地へ移行する傾斜変換線付近に小規模な扇状地を形成し須川に接している。

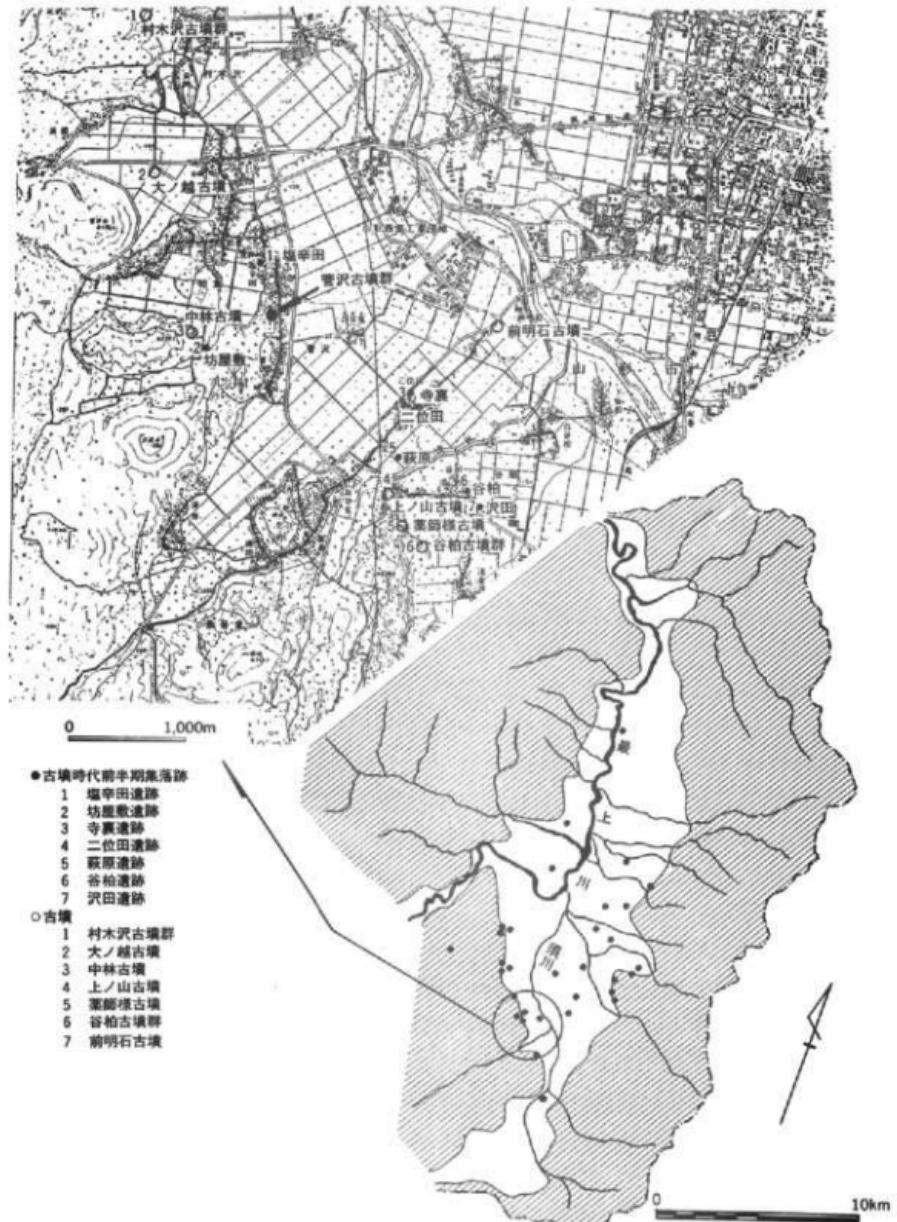
縄文時代の遺跡は、丘陵上の台地や丘陵山麓部の傾斜変換線付近に点在し、山形市谷柏周辺や二位田、柏倉付近に集中して分布する。その多くは縄文時代前期から後期にかけてのもので、山形市長谷堂の百々山遺跡は縄文中期前葉の代表的な遺跡である。

弥生時代の遺跡は、山形盆地では29ヶ所あまりが知られている。その大部分は、扇状地扇端部の、前面に低湿地をひかえた微高地に立地している。土器は平行沈線による渦巻文・三角文・連弧文などをもつもので、弥生時代中期末の桜井式土器に並行する。須川左岸の地域では山形市谷柏遺跡が本沢川の形成した扇状地扇端部に立地し、柏倉の坊屋敷遺跡は平野部や谷が深く入りこんだ谷頭付近に所在する。また、山形市長谷堂の筏山遺跡・隔間場遺跡のように本沢川をのぞむ丘陵の高台に立地する遺跡もある。筏山遺跡のように紀元前後の弥生中期初め（棚倉式期）の遺跡もあるものの、谷柏遺跡からは石包丁が出土しており、紀元後2世紀の桜井式期には確実に水稻農耕が定着していたことを示している。

古墳時代前期の集落は、弥生時代の初期水稻農耕を基盤として、山形市谷柏の谷柏、長谷堂の萩原、二位田の寺裏、柏倉の塩辛田、坊屋敷などの各遺跡があり、弥生時代の遺跡に連続している例が多い。山形盆地でも古墳時代前期の土師器を出土する集落遺跡はほぼ全域にわたって認められるが、須川左岸地域で特に密集して分布する。

菅沢古墳群は菅沢集落の背後に連なる高崎山の稜線上にあり、北端部を一号墳、隣接する南側の墳丘を二号墳とする。その墳頂部からは眼下に山形盆地を一望することができる。丘陵の稜線上に所在する古墳群とすぐ近くの平野部にある集落跡址は、互いに密接な関連をもつものである。水稻農耕を基盤とする生産力の増大と蓄積が、小首長層による菅沢古墳群、大ノ越古墳といった古墳の造営の基盤をなしたものと考えられる。

山形盆地の古墳分布は巨視的には、(1)東縁の山麓部、(2)山形市谷柏から山辺町にかけての西縁地域、及び(3)中央部の平野域に集中して分布する。菅沢古墳のある(2)地域では、谷柏、中林、前明石、村木沢、根際、坊主窪、壇の山などの古墳があるが、その多くは箱式石棺を内部主体とする後期および以降の群集墳である。



第1図 菅沢古墳群位置図及び山形盆地の古墳分布図

## 2 自然的環境

菅沢古墳群は、高度160m台の丘陵上に位置している。山形盆地の南西縁をなす丘陵地の北の先端に位置しているため、東は視界をさえぎるものなく、竜山をはじめ、中央蔵王、北蔵王（雁戸山）を背景に、それらの麓に広がる馬見ヶ崎川扇状地を一望にすることができる。また北西は柏倉方面（大ノ越古墳方面）から、さらに月山をのぞむことができる。墳頂の主体部のおかれた方向は確定していないが、正しく東西方向ではなく、西の富神山と東の竜山とを見通す方向にあるようにもみえる。

逆に盆地底からみても、菅沢古墳群は丘陵先端のよくめだつところにあって、後述のように二号墳築造当時は赤土の化粧土におおわれていたであろうから、木々の緑のなかでひときわめだつ存在であったに違いない。

古墳群の立地している高度160m台の丘陵の東側稜線は本沢川あるいは遅沢川（おそらく前者）の河岸段丘面であり、第2図の地点a, b, cには層厚が最大数mの河成疊層が分布している。丘陵をつくる地層は第三紀中新世のいわゆる緑色凝灰岩類で、地点b, cや菅沢二号墳の地山層は細緻状の凝灰角砾岩である。

河成疊層の分布は丘陵の東側の若干下った肩状の部分に限られているようであり、菅沢二号墳の部分には及んでいなかったであろう。二号墳の部分は波状の尾根型斜面にある。

地点c（古墳群に通じる農道の切り割り）でみられる土壤断面は次の通りである。



第2図 菅沢古墳群とその周辺の地形図

- ・地表より0.5mまで、河成疊層（最大径30cm、凝灰岩および安山岩の円錐）風化著しく赤褐色を呈する。地表より0.3mまで根などの網状が密。
- ・地表下0.5m以下、凝灰角砾岩（細緻状）・約1mまでの間は風化によって割れ目が多く、風化して粘土化した部分は2.5YR4/8の赤褐色を呈する。
- ・地表下2～3m（道路床）にて、緑色凝灰岩の本来の色調となっている。
- ・すなわち、二号墳上半部の化粧土および版築層である赤褐色の角砾層は、周辺の基岩の風化帯を材料にしていることがわかる。

## II 調査の概要

### 1 調査の目的

菅沢古墳二号墳が古墳として確認され周知されるようになったのは、上山市の土矢倉古墳群の調査が行われていた頃、つまり、昭和42年であるという。その後、古墳周辺の開墾により石棺が発見されたことや、山形市史の編さん事業の一環としての必要性から、昭和42年10月及び昭和43年8月そして昭和44年7月の3次にわたり測量調査や一部発掘調査が実施されている。

その結果、菅沢古墳二号墳は、二段築成の円墳で県下最大の円墳であること、埴輪を有する古墳であること、またさらには、二号墳の他にも隣接して墳丘の存在が確認され、古墳群を形成する一古墳として知られるようになった。

上記を受けて、昭和44年3月14日に「菅沢山古墳群」として一～三号墳の区域が山形市の史跡として指定を受け、さらに二号墳については、昭和48年6月11日に山形県の史跡指定を受けて現在に至っている。なお、山形市は昭和46年度において、二号墳の区域約4,485m<sup>2</sup>について、古墳の保存用地として史跡の公有化を実施している。

さて、今回の発掘調査は、この県指定史跡である菅沢古墳二号墳について文化財の保護保全とその活用の見地から、史跡の復原整備を最終目的として山形市三ヶ年実施計画事業に位置づけを行い、その第一段階として実施したものである。

具体的に、復原整備のための条件提示としての今回の発掘調査では、

- ① 古墳ならびに古墳が築造されている地形の現況把握
- ② 古墳の規模と構造（墳形、墳丘規模、周溝、埴輪配置状況）の確認
- ③ 古墳構築法の確認
- ④ 内部主体の確認

を主たる目的として、従前の調査成果の追加補足として実施したものである。

調査の実施にあたっては、本古墳が既述のごとく県指定の史跡であることから、県教育委員会文化課との事前の打合せを行い、昭和60年度発掘調査については県の補助事業として実施した。

なお、二号墳復原の計画年次は、

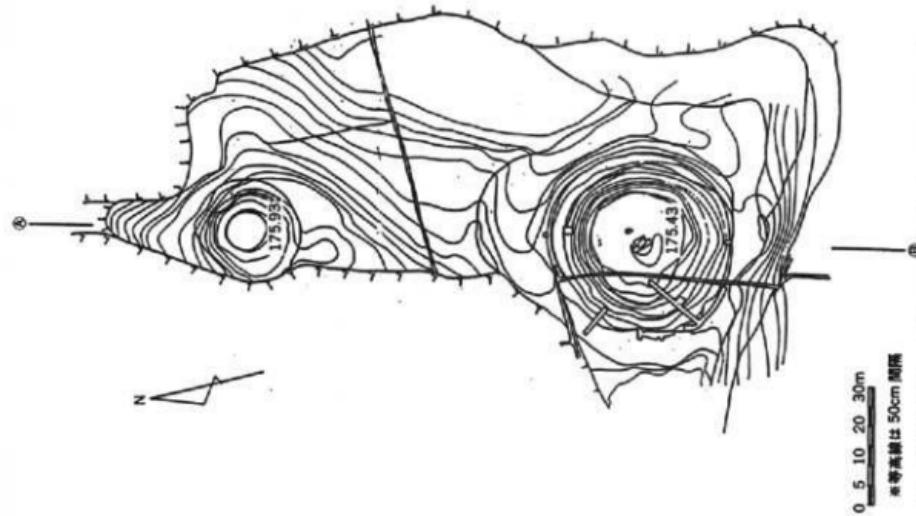
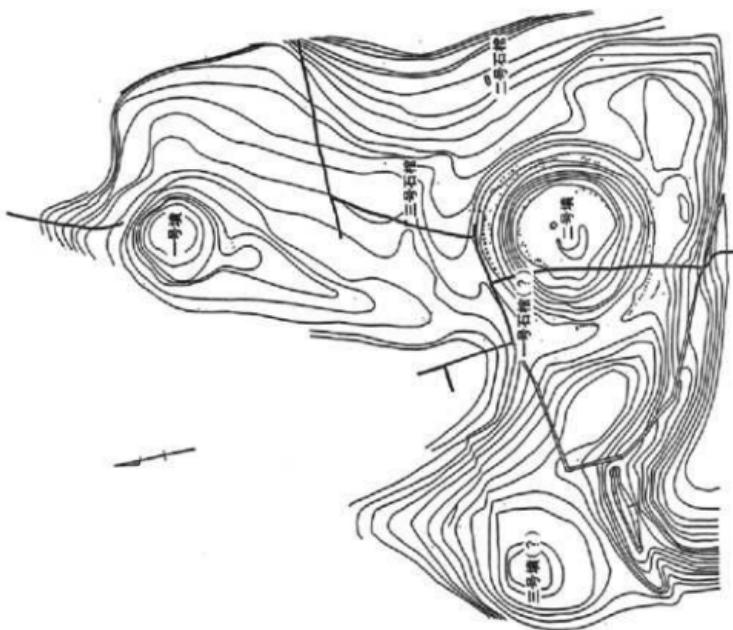
昭和60・61年度	発掘調査	
昭和62年度	基本計画（構想）、基本設計、実施設計	
昭和63年度	復原整備	の予定である。

第3図 従前の菅沢古墳群調査図

- 5 -

a. 菅沢古墳群全図（山形市文化財保護委員会図）  
[山形市史] 上巻 (1973) から  
・場所を示す

b. 菅沢古墳群図（北方は一号墳・南方は二号墳）（山形市文化財保護委員会図）  
[山形市史] 資料編11巻 (1969) から  
・等高線は 50cm 間隔



## 2 調査の方法

発掘調査に先だち、昭和60年5月、音沢古墳二号墳を含む音沢古墳群の範囲について、現況を正確に把握するため、50cm間隔等高線による地形測量(平面、縦横断面)と丈量測量を実施した。

発掘調査にあたっては、測量時に東西・南北10mのグリッドを組むとともに、二号墳の区域については5mのグリッドを組んだことから、これを基準として南北方向をA～O、これに直交する東西方向を1～15とした座標を設定した。

今回の調査目的は、先に述べたように復原整備を前提として、古墳築造当時の姿を少しでも多く把握することにあった。すなわち、全面的発掘調査を行えばその全貌が明らかにされるはずであるが、遺構の保護の見地から、部分的調査にとどめることとして、なるべく全貌把握に近づくべく考慮した。

そのため、墳形の再確認のための墳麓確認及び規模の確認のための墳麓径や周溝幅確認の目的で、かつ、一部墳丘の築成方法について手がかりを得るために、ほぼ墳丘の中心を通る東西南北にトレンチを設定した。

また、本古墳は二段築成と考えられているものの、現況を概観するに、北側及び東側ではその様子がよく観察されるが、南側では不明瞭となり、西側ではほとんど段差が認められないという状況を示す。このような状況が本古墳の本来の姿なのかどうか、また、墳丘西側については、昭和40年代初頭のブドウ畠(棚)造成のための開墾により変更を受けているという地元の方々の話などもあり、段差確認及び墳麓部の確認の意味から、この区域に数本のトレンチを設定することとした。

さらに、本古墳については、埴輪(円筒形、器財形)を有する古墳であることがこれまでの調査などにより確認されているが、その設置箇所や設置のし方及びその種類等の確認のため、あわせて、古墳築造時期を明らかにする遺物なども得られればということから、一部に面的調査区域を配した。この面的調査区域は、埴輪が下段上面に配されることが從前より知られることから、二段築成が明瞭に観察される東側部分に設定した。

また、墳頂部については、從前調査の結果として、「削平を受けているが石棺が埋設されていたようである」と報告がなされていることから、その削平の状況や主体部痕の確認のため、墳丘中央部の3グリッドについて調査した。

### 3 調査の経過

本古墳の調査は、当初昭和60年度実施として計画されたものであるが、調査開始時期の遅れから調査半ばで降雪期を迎え、一時中断のやむなきに至った。このことから、融雪期以後、昭和61年度に調査を継続することとなった。ここに調査の全般的な経過を記す。

#### 昭和60年度

10月14日～16日 器材運搬を行うとともに、古墳全体が笹で覆われていたことから、笹・雜木等の除伐を行い調査区を設定する。

10月17日～29日 東トレンチ(G-1～6グリッド)、西トレンチ(G-9～14グリッド)、南トレンチ(A～F-7グリッド)、北トレンチ(I～N-7グリッド)について、笹根の強く張る表土の除去を行う。

10月30日～11月11日 墳丘の東北部(I～K-2～5グリッド)、東南部(A～E-1～4グリッド)の表土除去を行う。この時点において、C-4グリッドに埴輪が密集して確認される。

11月12日～30日 東西南北に墳丘中心を通る形で幅1mのトレンチを設定し、墳丘の断割りを行う。

12月2日～12月3日 墳頂部(H-7, G-7～8グリッド)の掘り下げを行う。本来はこの過程の早い段階で確認されるべきであったが、H-7グリッドに土色変化が見られ、これが主体部になるものかと考えられた。

12月16日～20日 降雪期を迎える、冬越しの手当を行い、調査を一時中断する。

3月10日～30日 調査を再開し、各調査区の清掃を行う。

#### 昭和61年度

4月1日～6日 墳頂部(H-7グリッド)の土層観察と西側周溝部の観察を行う。

4月8日～13日 東南墳麓部(C-4グリッド)埴輪密集地の精査を行う。

4月14日～30日 墳頂部(H-7, G-7～8グリッド)の土層図作成を行う。

5月1日～5日 東南墳麓部(C-4グリッド)の埴輪の取上げを行う。

5月6日～17日 東西南北のトレンチその他調査区について土層図等の作成を行う。なお、5月18日には、帆立貝型となるかについて墳形確認を行う。

6月27日～7月14日 墳頂部墓壙等の最終確認を行い、埋戻しを始めた。なお、7月5日には、現地に市民約80名の参加を得て現地説明会を開催した。

以上が経過であるが、作業員の手薄から長期にわたる調査となった。この期間、各関係の方々から、甚大なる御指導、御援助をいただいたことをここに記す。

### III 調査の成果

#### 1 墳形と規模

菅沢二号墳は、直径56m、高さ4.5mの二段築成の円墳で、周濠をめぐらす。下段の径56m、高さ1m、上段の径40m、同高さ3.44m。丘陵頂部標高167m。

これが、昭和43—45（1968—70）年に、柏倉亮吉氏を担当者とした、山形市史編纂室・山形市教育委員会の第1—3次調査での墳形・規模であった（柏倉亮吉1973『山形市史』上巻所収、小野 忍 1981『日本考古学年報』21/22/23所収など）。したがって、菅沢二号墳は、東北地方第一の円墳で、前方後方・前方後円墳をふくむ50m以上の主軸長をもつ大型古墳と並べても30位以内となるであろうし（氏家和典1984『宮城の古墳』（『宮城の研究』第一巻所収）、日本全体の円墳でも25位程度かと見られてきた（森浩一1976『古墳と古代文化・99の謎』）。

今次調査で、地形測量および発掘による墳麓確認の結果は、丘陵頂部海拔165m、東側墳麓海拔159.5m、西側墳麓海拔161m、丘陵頂部径東西約23m、南北約25m、上段麓径約40m、下段墳麓径51~53m、北側で測った上段高さ約3.5m、下段高さ約1.5mとなった。これは後に述べる周濠の幅と深さの確認ともかかわるが、墳径はやや短かく、高さはやや高い数値が得られたことになる。

そしてこの数値は、第1表のように、東北地方の50m級円墳とほぼ同じ規格とみてよいという結果となったことを意味しようか。細部の検討を要する。

ところで、墳丘南麓のあまりはっきりしない周溝外縁が東南方向へ自然に高まる。この部分があるいは前方部張り出しとなって、帆立貝式の古墳になるまいかと、以前に疑ってみたことがあったので、調査途次に念を入れて確認した。結果はその可能性は完全に否定された。

第1表 東北地方の大型円墳

番号	古墳名	所在地	墳丘規模(m)		外表施設(○有、×無)				立地	文献
			径	高さ	段	築	ふき石	埴輪		
1	菅沢二号	山形県山形市	51~53	5	2段	×	○	○	丘陵	本報告書
2	小塚	宮城県名取市	54	6.5	3段郎	×	×	○	丘陵	『名取市文化財調査報告』
3	毘沙門堂	同 上	約50	6.2	2段?	?	○		平地	『宮城県史・考古資料』
4	御山	宮城県色麻町	約50	6.0	2段?	?	○		平地	『色麻町史』
5	夷森	宮城県宮崎町	48	11	?	○	×		丘陵	『宮城県史第一巻』

## 2 周溝

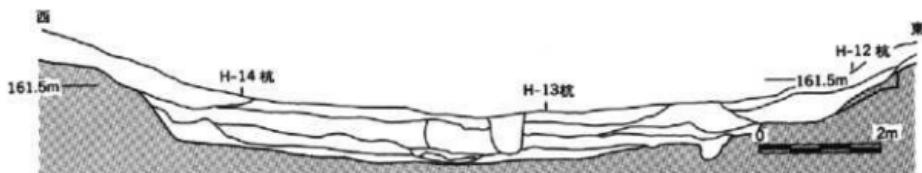
本古墳の周溝については、墳丘の西側及び北側で比較的よく確認できた。ここでは、特に明瞭に観察することができた西側の周溝部（G-12～14グリッド）について述べる。

西側周溝部については、昭和40年代の開墾時に受けたと思われる墳丘斜面中部以下の擾乱層（厚さ約60cm）の下に、地山（角礫凝灰岩）を削り出して造られていることを確認できた。その幅は、墳麓削り出しから西側の立上りの下端まで約10mある。また、深さは削り出された墳麓の高さから溝の最深部まで約70cmある。周溝底面は基盤であることが確認は容易であるが、基盤の上には赤褐色砂質粘土の層があり、その上に、溝の埋土としての暗赤褐色土が見られる。基盤上面の赤褐色砂質粘土層については、墳丘西側の各調査箇所で確認され、周溝削り出し後の整形としてとらえるべきものなのか検討を要する。また墳麓部に近い周溝底面に二本の細い溝が検出され、これらはトレンチ内では墳麓線に平行している。

次に、西側以外の周溝部の周溝幅について簡単に述べる。

北側（M～N-7グリッド）では若干の周溝外縁の立上りを認めることができ、その幅は7.5mある。南側（A～B-7グリッド）のうち、A-7グリッドの高まりが自然的高まりとして確認できたことから、これを周溝外縁とした場合その幅は6.25mある。また、東南側（D-1～2グリッド）において確認した高まりを周溝外縁とした場合、その幅は7.5mを測る。同様に東側については、昭和40年代のブドウ畠（棚）造成時に重機により土が動かされているといわれ、今回は周溝を想定させるものにはあたらなかった。

以上、二号墳の周溝については、東側で確認には至らなかったものの、従来考えられていた幅4mのほぼ倍の幅で、全周を浅くめぐるものと考えられる。



第4図 菅沢二号墳の西側周溝断面図 土層の記載は付図3b参照。

## 3 築成方法

東西南北トレンチの壁にみられる土質断面を附図3に、墳頂部のG-8, H-7グリッドの2トレンチの底面および壁面の土質図をそれぞれ附図3, 4に示す。

### 〔層序区分のあらまし〕

二号墳をかたちづくっている土質は東西トレンチ断面で示すと概略次の通りである。

上より下へ：

I層	約0.7m	赤褐色、砂礫層（化粧土）	VI層	厚さ約0.5m	暗褐色砂質粘土層（旧表土起源の 版築層もしくは旧表土層）
II層	厚さ約1.5m	暗褐色砂礫層を主体とし、雜層と 明褐色砂質粘土層との不規則な互層（版築層）	VII層	厚さ約0.8m	褐色砂質粘土層（旧表土下層もし くは、これを起源とする版築層）
III層	厚さ約1.2m	褐色～にぶい赤褐色の砂質粘土 層（版築層）	VIII層	厚さ約0.4m以上	明褐色砂質粘土層（地山層、 基岩の凝灰岩の風化帶）
IV層	厚さ約0.5m	暗赤褐色砂質粘土層（版築層）			
V層	厚さ約0.7m	褐色砂質土層（版築層）			

さらに、墳麓部～周溝部にかけて、溝を埋積している層厚約0.6mの暗褐色～明褐色の砂質粘土層などがある。また墳頂部主体部の0～8層の区分は、前述の大区分のI・II層およびこれに切り込んで埋めもどした粘土構造およびその内部の覆土、さらに両者をおおう覆土である（附図3、4）。-1、-2層は後世の擾乱層である。

東トレンチ北壁面のI・II層の詳細を第6図に示す。

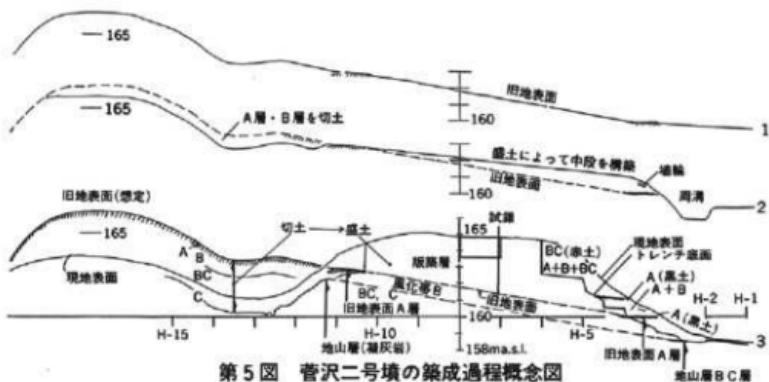
### 〔旧地表面の認定〕

東トレンチ壁面では、旧表土の黒土起源とみられる土層はVI層およびVII層であり、VII層中部が旧地表面である可能性が高い。VI層全体にわたって炭化物がまだら状にふくまれており、土師器細片がまれにふくまれている。VI層上面とV層下面の境界は不明瞭であり、VII層そのものが地表現象もしくは人為によって上下に擾乱されている。VI層中部に炭質物のレンズ（層厚約5cm）があるので、一応VI層中部を旧地表面と考える。

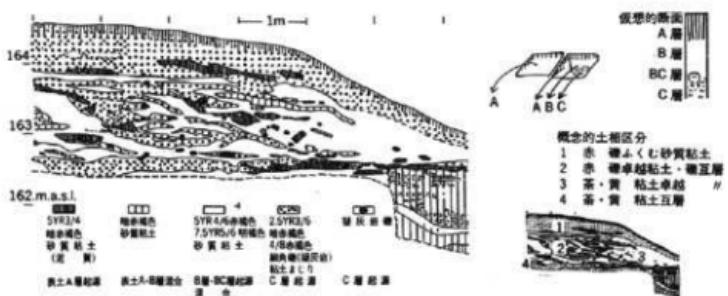
VII層は無構造（基岩の構造を残さない）の褐色～にぶい黄褐色の砂質粘土（細礫をふくむ）であり、基岩が風化して土壤化作用をうけて生じた土壤下層に相当すると考えられるが、墳麓覆土に近い部分には、遺物細片（5mm位）がふくまれていて、弱い上下の擾乱もうけていることがわかる。西トレンチ・南北トレンチの壁面では、東トレンチのIV・V層相当層を欠いており、VI層相当層の高度が高い。高度関係を第2表に示す。南・西トレンチではVI層上面直下約5cmの間に炭質物が多く含まれている。墳丘構築に際して、樹木および下草を焼きはらったことがうかがわれる。VI層・VII層相当層の関係は東西南北すべてのトレンチにおいても同様である。

### 〔築成に要した土量〕

1m間隔等高線より概算すると約3,000m<sup>3</sup>である。高度163m線以高はほぼ円形の平面形、162～159m線は地山層が北東へ傾下しているので半月形の平面形を想定して計測した（附図3B）。築成に要した人夫量は1日1人が5.8m<sup>3</sup>を移動するものとして（1立方間：加藤・



第5図 菅沢二号墳の築成過程概念図



第6図 菅沢二号墳東側トレンチ北側壁の築成 付図3a 参照

佐藤, 1982, 最上川, p.831)。約500人・日である。

#### (版築層の土質と起源)

版築層の材料となった自然土の土壤断面を仮想的に次に示す(p.3, 地点cの記載参照)。

黒土層 (腐植に富む: A層とする)

褐色系土層 (土壤化作用をうけている, 土壤下層: B層)

赤褐色砂質粘土または細角礫層 (基岩の風化帯上部で土壤の母材: BC層~C層)。

版築層は、この土壤断面の任意の深さから堀り取ってきている。したがって版築層の下半部であるIII~V層はAおよびB層起源のものが多く、暗色泥質もしくは褐色粘土質のものが多い。両者はブロックで混合されたため、偽縞状のまだら模様となっている。

版築層上半部であるII層はBC~C層から掘り取られており、しかもくだかれないブロック(細角礫岩状の凝灰角礫岩)のままの大きな角礫が含まれている。II層はBC層・C層起源の角礫とA層およびB層起源の泥質のものとが不規則な互層をなしている。東トレンチ上のII層の西側(第6図右下-2層)は前者の比率が高く、東側(第6図右下-3層)は後者の

比率が高い。

I層はとくに赤味が強く2.5YRの赤褐色を呈する。おそらく仕上げの化粧土として積まれたものであろう。その起源はBC層である。

#### 〔版築過程〕

前記の土相に注目した大まかな層序区分I～Vの境界線はほぼ水平であり、それぞれ版築の過程のなかの比較的大きな段階を示している(第5図)。とくにIV層上面は高度的にテラスともからんで注目される。各層のなかの土相境界線は、ひとつひとつがレンズ状の断面形をなし、土盛りの作業単位を示している。その境界線は相対的に土相の差(材料の起源の差)が認められるところ、もしくは疊やブロック状の泥質土のならび(薄いレンズ状)などによって記入した。尖滅として表現した部分もある(附図3)。

全体としてみると、層内の境界線は外方に緩く傾いた線が多い。すなわち中心から外に向かって盛土を広げている。

#### 〔埴丘の築成過程〕

地山層の上限高度は東西に非対称である(第2表)。東側の版築層の下半部は表土に近い部分を材料としている。おそらく西側の地表を掘り込み、東へむかって押し出したものであろう(第5図)。

下半部(テラス)が築成されて一段階を終える。このとき、みかけ上の水平面が形成された(実際は西が高く、東が低い)。

次いで、埴丘上半部が版築されたが、材料はおそらく西側をさらに掘り込んだ、表土の下層部分の赤褐色の風化土が用いられ、中心から外方へ押し出すように築成された。

第2表 善沢二号墳の築成高度

トレンチ	地山層上面高	黒土上面	テラス高度 (幅)	(高度差)	埴籠線位置の 地表面高度 (周溝幅)
北	160.9	161.4	(162.3?)~161.7~161.2(1.1?~0.5) (4.1?) (2.5)		160.3 (9+α)
東	158.8	160.0	161.2~160.6 (3.0~3.2)	(0.6)	159.3 (3.5+α)
南	161.8	162.2	162.5~161.5	(1.0)	161. (6.5≥)
西	162.6	162.9	不 明		161.3? (10≥)

	西	南	北	東	(記号説明)
165	—	—	—	—	墳頂の肩の高度
164					
163	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	旧地表土
162					中段の高度
161					墳籠
160					地山層上面
159					
158m a.s.l.					

#### 4 下段上面（いわゆるテラス）

菅沢二号墳は、2段に築成されたと考えられる。まず、下段上面（以下テラスと略称する）の高度と幅は第2表のように、東側で低く、幅広い。次いで北側がやや高く、やや幅がある。南側では不明瞭で、西側ではほとんど認められない。

墳麓線の高度も西側が高く、南側、北側、東側の順で低い。したがって、墳頂の肩から墳麓までの高度差は東側が最も大きく西側が最も小さい。テラスの高度は墳頂の肩から墳麓までの中間よりはやや低い位置を占めている。

中段が南側で不明瞭で、西側ではほとんど認められない理由は、次の2つが考えられる。

- ① 西側にはもともとテラスがつくられなかった。
- ② 西側にテラスがあったが、後世に失われた。

①に関して、墳丘は地山の高度に支配されて東西方向で非対称形である。墳頂～墳麓の高度差の大きい東側においてテラスをつくって、これを水平にめぐらすと、西側では地山に切り込んだ墳麓の高度になってしまう。したがって墳頂と墳麓の中間に段をめぐらすと、その高度はあたかも頭に斜にハチマキをしたように西側が高く、東側が低いことになる。そのため、テラスの幅も東側が広く、西側がせまかったと考えられる。

②に関して、西側トレンチでは斜面中部以下に擾乱層がみられる。ブドウ棚がつくられていたときのごく新しい擾乱の可能性がある。

いずれにせよ、墳丘の周囲をめぐって歩いてみると判るが、墳麓・テラスともその高度が変化していることはほとんど気にならない。墳丘築成当時に幾何学的に完全に対称なものを意図しなくとも、実用上（東側を正面？にみたてて祭祀を行う。まためぐって歩くのに）差しつかえなかったことも考えられる。

東側・北側・南側トレンチ壁面でテラスの構成土層をみると、旧表土起源の黒土層がかかわっている。北側・南側では旧地表面そのものの黒土層であり、東側では旧地表土起源の黒土層を盛土してしている。いずれの黒土にも上下の擾乱が認められるが、それがどの程度の時間を示すものは判らない。すなわち、まず下段上面まで構築された後、一定時間（黒土が形成される時間）経たのちに、墳頂部（上段）が版築築成された可能性を含めて、今後の検討課題である。

#### 5 主体部

##### 〔墳頂部および主体部の土層〕

墳頂部の構成層は、H-7（主体部）、G-8のトレンチ（附図3、4）および東西南北各トレンチの上部（第6図、附図3）において観察できる。トレンチでは少くとも厚さ2m以上の赤褐色の砂礫および砂質土の互層（化粧土層および版築層）が観察でき、G-7



G-7トレンチ北東隅。6層は粘土層の一部。ハンドボーリングは墳頂面より1.85mまで、底より1.5mで版築層基底の黒土層に達した。

トレンチ北東隅の床面より径9cmのハンドオーガーによる穿孔を試みたところ、床面より1.85mまで、墳頂面より約3.2mまで砂礫粘土および砂質粘土よりなる化粧土層・版築層であることがわかった。その直下(高度約161.8mより10cmの間)は、旧表土起源の暗褐色(5YR3/3)の粘土、その下位に20cm以上の(暗)褐色(5YR3/4~4/6)の粘土層がつづいている。これと同様の関係は東西南北トレンチでも観察された。旧表土を示すと考えられる暗赤褐色粘土の<sup>14</sup>C年代測定結果は、2,140±80年B.P.(Teledyne labo.社, I-14, 652)であった。

古墳の推定年代とは約500年の差があるが、これが表土の形成履歴にかかわるもの(A層における腐植の堆積時間)か、当時すでに埋段土となっていたものを材料としてもちこんで版築の始まりとしたものかなど未だ決め難く、さらに検討を要する。

H-7, G-7, G-8トレンチにみられる土層は下位より上位に次のように区分される。  
7層：赤褐色疊層。墳頂部の化粧土層。  
6層：特徴的な黄褐色粘土層で主体部の粘土塊を形成している。上面はほぼ水平で、基底は舟底形を示すと予想され、その基底面上半分の立ち上りはH-7トレンチ東壁およびG-7トレンチ東壁において観察される。上面から基底までの高度差は1.5m以上。  
5・4・3層：赤褐色の砂礫および砂質粘土層 主体部の覆土。粘土塊の縁では水平であるが、内側では落ち込んでいる。  
2層：暗褐色の砂質粘土層であり、平面的広がりは粘土塊内部に限られていて、木棺などのあった部分が落ち込むにともなって周辺から流入・堆積した土層であろう。最大厚さは1.3mと堆定される。その基底はH-7トレンチ東壁(トレンチ底より約20cm下るサブトレンチ)によって観察され、さらに径1cmのハンドボーリングによって舟底形をなすと推定される。木棺が包まれる層準は2d層下半部であり、3'層は棺をすえるために3層を落し込んでいるように解釈される。

1層 暗赤褐色の砂質粘土層。疊まじり。4層とほぼ同一岩相を呈し、4層と同一母材起源の覆土である。表土化作用をうけている。とくに笹の細根の密な部分を0層とした。  
-1層・-2層 明らかな後世の擾乱層。  
-2は昭和43年の調査時のトレンチの痕か。  
-1は断面形が不規則かつ埋土に大きな埴輪片が含まれるなど盗掘を試みた痕のようである。

### 〔主体部の規模〕

墳頂部H-7グリッド内の主体部は、層厚30cmの笹の細根密な褐色砂質土(0層)を剥いだ段階で気付かれるべきであった。しかるに、H-7グリッド南半は墳頂面から110~130cm、北半は70~100cm掘り下げた段階で作業が中止された。

この時点で作成されたのが、附図4である。

墳頂中央部や東北寄りに、東西方向に長方形の墓壙の痕跡が確認された。H-7でグリッド内にみられるその痕跡は、現在長3.3m、幅は東側壁面の観察によると1.9mである。内部におそらく木棺が埋置されていたと思われる。棺の痕跡は、いまのところ東側壁面の断面とこの壁面に沿ってのボーリング探査からの推定であるが、棺の痕跡は、基本的には断面が逆台形状というよりも半円形にちかい可能性も考えられる。この棺の痕跡推定部分の外縁に広く、厚く褐色のしめた砂質粘土(6層)がみられる。この6層は、版築の一つの層としては、墓壙の痕跡ある外縁がとくに厚く積み重ねられていると推定されるところから、粘土構もしくは粘土床の意味をもつ可能性も考えておくべきか。菅沢二号墳の墓壙は、H-7グリッドおよび他の部分での土層の観察からすれば、墳丘版築層に墓壙を掘り込んだことは明瞭である。

菅沢二号墳の墳頂部では、H-7グリッドにかかる木棺の埋納されていたことが明らかとなった。一方、これに隣接するG-7、G-8グリッドにはその痕跡を見出すことができなかった。この古墳は、東北地方の他の50m級円墳と比較すると、墳径に比して高さがやや低い(第1表)。しかも墳頂は広く、今記述している主体部は中心よりやや東北に偏している。したがって、他に墳頂に埋納施設はなかったかが問題となろう。これについては確言できない。つぎに、この墓壙の長さも確定されてない。しかし、墳頂平垣面の東端までの距離を考えると10mを越すことはないと思われる。今後の参考のために、山形県内で発見・発掘されている、割竹木棺や木棺直葬とされる古墳の墓壙を集成しておこう(第3表)。

第3表 山形県内の古墳にみられた木棺集成

	古 墳 名	所 在 地	墳 丘(m)	主 体 部 規 �模(m)	出 土 遺 物
1	菅沢二号	山形市菅沢字山崎	円墳 径53×51, 高5.0	(3.3+α)×1.9×? 墳頂下2.5m	?
2	衛守塚二号	山形市漆山字道下	円墳 径11高1.5	3.76×0.99×0.288 墳頂下2.5m	堅櫛、弓、曲物、石製模造品、土師器
3	お花山一号 (一号棺)	山形市青野字お花山	円墳 14.0×14.8	(350)×70	鏡1面、勾玉3、管玉11、小玉354、櫛1、筋鍾車、リング1、鉄製品片1
4	〃 一 号 (十号棺)	〃	— —	274×60	鉄劍1、鉄箇1、刀子1
5	〃 二 号	〃	— —	290×52	須恵器小型壺1、刀子1

	古墳名	所在地	墳丘(m)	主体部施設(m)	出土遺物
6	〃三号	〃	(円墳) (15~25)	210×70	鉄鏃29, 刀子2, 鉄鋒1, 銅留金具7, 銀金具1, 管 玉6, 小玉13, 磁石1
9	〃四号	〃	円墳 10.12×9.32	305×57	(掘り方覆土)土師器壺1, (主体部)勾玉1, 管玉14, 琥珀玉4, 瓢玉1, 小玉21, 刀子片1
8	〃五号	〃	—	—	—
9	〃六号	〃	—	280×95	—
10	〃九号	〃	円墳 9.6×12.2	294×65	小玉15
11	〃十二号	〃	? —	245×53	鉄鏃28, 刀子1, 鈎1
12	〃十三号	〃	円墳 10.40×9.85	385×130	(主体部)刀子1 (掘り方覆土)壺片
13	〃十六号	〃	—	280×55	櫛残片1
14	〃十七号	〃	—	323×90	—
15	〃二十号	〃	円墳 7.85×7.20	246×56	—
16	〃二十一号	〃	—	295×55	刀子1
17	〃二十二号	〃	(円墳) (11.20m)	350×328	鏡1面
18	〃二十三号	〃	—	280×55	(掘り方覆土)刀子1
19	〃二十四号	〃	(円墳) 19.60×15.80	440×100	鉄鏃24, 小刀1, 刀子2, 馬具1
20	下小松 六十一号 (一号棺)	川西町下小 松字舞台山	前方後円墳主軸 長25.5 後円径15	350×100 (270×60) 墳頂下1m	直刀1, 鉄環1 鉄鏃3
21	〃六十一号 (二号棺)	〃	〃	402×100	鉗1, 刀子1, 鉄鏃1
22	〃六十四号	〃	円墳 8.1×8.9	2.55×80×50	—
23	〃百六号	川西町下小 松字薬師沢	方墳? 24×19.5	620×75 墳頂下85cm	?

#### 凡例

墳丘の規模は主体部長軸方向×短軸方向(内法)の数値である。  
内部施設主体部の規模は、上場の数値。

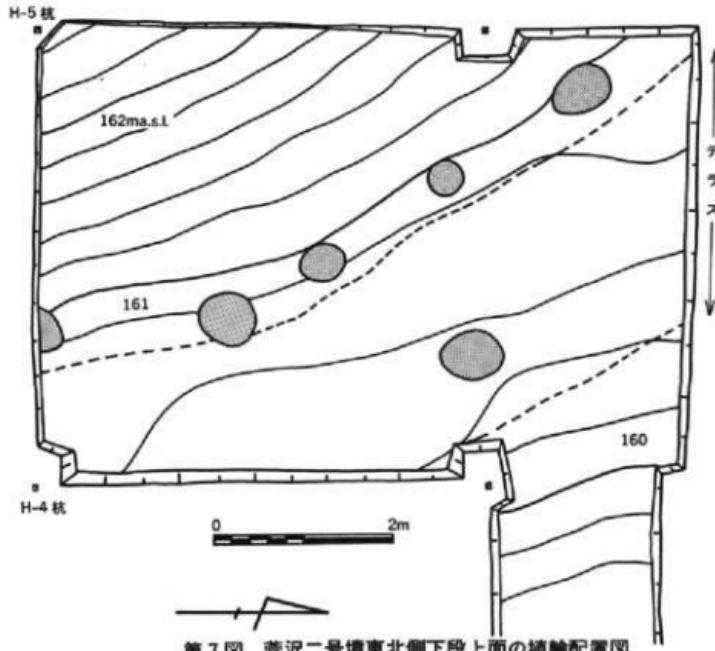
## 6 墳輪の配置

二号墳の埴輪については、昭和40年代初頭の三次にわたる調査から、次のことが知られている。

『この墳丘上に、ふためぐりの円筒埴輪の円列がある。その一つは、下段上面の周縁に並ぶもので、径43~45メートル程。その一つは更に高く、上段の頂上部をめぐる径23~24メートルの円列である。埴輪の地下に埋められた根部が、原状を保つところがあり、それでみると、各円筒埴輪が隣りのものと密着するものではなく、約1メートルの間隔をもって立てられている。墳丘上に崩壊した埴輪断片があり、それには円筒埴輪の他に、家形・馬形・鎧形・楯形・韁形・きぬがさ形などの形象埴輪がある。』(山形市1972『山形市史』上巻 原始・古代・中世編)

さて、今回の調査において、埴輪の配置についてその傍証を得られた箇所は、次のとおりであった。

一つは、H-4とI-4グリッドにおいて、墳丘下段上面（テラス）に確認された埴輪据え方痕である。径約40~50cm前後、深さ約20~30cmの据え方が、約120~180cm前後の間隔でならんでいる（第8図、図版14）。また一つは、同グリッドにおいてテラスの下側の縁に検出された据え方痕である。前者については、掘り方内から埴輪片の出土した箇所が二



第7図 菅沢二号墳東北側下段上面の埴輪配置図

箇所あるとともにその配列状況から、埴輪配置列を形成する一部と考えられるが、後者については、据え方痕とした場合1箇所の確認にとどまり、周縁部の配置列の一部かどうかは検討を要する。なお、据え方痕は確認できなかったもののD-4グリッドにおいて、周縁部に円筒埴輪が原位置を保つような状況で検出されている。さらにJ-3グリッドにおいては、下段の埴籠部に上記の据え方等と同じ土色変化を示すプランが確認され、これについても、埴輪据え方の可能性を有するようである。

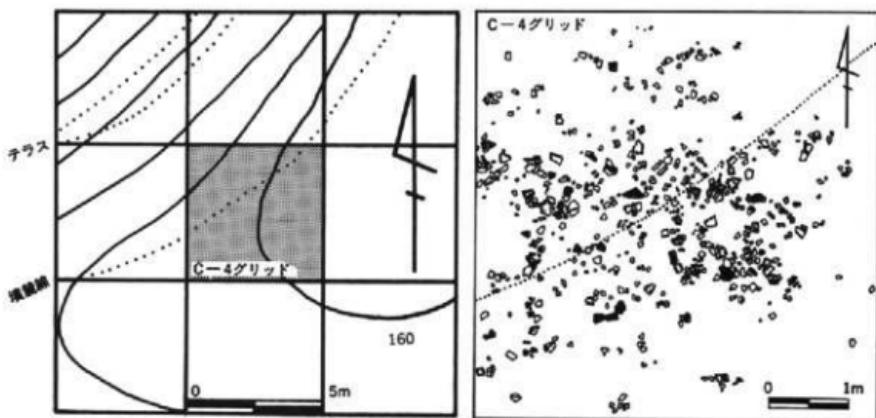
以上、墳丘下段部における埴輪配置であるが、墳頂平坦面における埴輪配置については、充分に調査することができず、据え方痕をまったく確認することができなかつた。しかし、円筒形及び器財形埴輪の破片が数片検出された。

その他、埴輪の出土に関連して注目された箇所としてC-4グリッドがある。このグリッドは墳丘東南の下段上面の縁辺から埴籠及び周溝にかかる部分である。そして、この下段法面から周溝部にかけて、円筒、朝顔形円筒、器財形埴輪片が密集して検出された。精査の結果、据え方痕は確認されず、上部位置からの流れ込みによるものと考えられた(第9図)。

このように、本古墳の埴輪については、従前及び今回の調査から、円筒及び朝顔形円筒、器財形埴輪が、次の箇所へ配されたと思われる。

- ① 墳頂平坦面
- ② 下段上面(テラス)
- ③ 墓籠部

なお、テラスについては、上段の籠部近くと周縁部の二周りの配列が考えられる。また、C-4グリッド出土の埴輪には、数種の器財形埴輪片を含んでおり、これらを整理することにより、より具体的に本古墳の埴輪の配置、配列が検討されよう。



第8図 菅沢二号墳東南墳籠部の埴輪出土状況図

## IV 考察と結び

### 1 今回の調査のまとめ

今回の調査は、本古墳の復原整備を前提として、古墳の規模と構造すなわち墳形・墳丘規模・周溝・築成法・内部主体・埴輪の配置の確認を主たる目的としたが、これらの項目について把握できたことを簡単にまとめて記す。

- 1 墳 形…墳丘南麓の部分が前方部張り出しとなる帆立貝式の古墳の可能性はなかろうかと考えられたが、その可能性は否定され、従来どおり円墳として確認された。また、墳頂は削平されたものではなく、もともと平坦な面であった。
- 2 墳丘 規 模…墳丘の平面形は、下段の底径東西51.0m強、南北53.0m強あり、やや梢円形状を呈する。上段麓径は東西・南北約40mで、墳頂面は東西径23.2m、南北径25.8mある。また、北側の上段の高さは3.5m、下段の高さは1.5mである。
- 3 周 溝…墳丘の北西～南西側での調査は十分でない。また、東側では確実な周溝幅は確認できなかった。しかし、その他の区域の調査から、従来から考えられていた幅4mの周溝に比して、そのほぼ倍前後の周溝が浅くめぐるものと考えられる。そして、西側の丘陵削り出し部分と地山の高い北側では、墳丘径の1/6（幅約9m）を意図したかに観取された。
- 4 築 成 法…本古墳の築成については、旧地表の認定とともに版築層および版築過程、さらには、墳丘の築成過程を確認することができた。また、本古墳は二段築成であることが墳丘東側と北側の外観で確認されるが、南側および西側ではテラス（下段上面）が不明瞭である。このことについては、本古墳の墳丘は地山の高度により支配され、テラスは墳頂から墳麓の高度差の大きい東と北側でより明瞭だが、高度差の少ない南と西側で不明瞭になった、あるいは後世の破壊によって失われたと考えられた。
- 5 内 部 主 体…墳頂中央部H-7グリッドにおいてやや東北寄りに、長軸をほぼ東西にして確認された土色変化が内部主体を示す。この主体部はH-6グリッドに続くものであるが、H-6グリッドの調査はなされず墓壙規模も確認できない。確認できた部分の現在長は3.3m、幅は1.9mである。東側壁面の観察から木棺が埋置されたと考えられるが、粘土棺の可能性もある。いずれにせよ石棺ではなかった。また、墳頂部に他の埋葬施設

第4表 従前調査結果と今次調査結果の比較

従 前 の 調 査 結 果	
A 所 在 地	山形市大字菅沢字山崎
B 調 査 期 間	昭和43年10月(一次), 44年8月(二次), 45年7月(三次)
C 調 査 主 体	山形市史編さん委員会
D 古墳の種類墳形等	古墳群。一号墳一円墳 二号墳一円墳 三号墳一円墳?
E 墳丘の規模等	下段の底径56m 高さ1m 上面の径40m 上段の底径34m 高さ3.44m
F 外 表 施 設	墳頂部の周辺部と下段上面の周縁部に、円筒埴輪をめぐらしている。形象埴輪片もある(家形、馬形、桶または鞆形、きぬがき形など)。葺石なし。下段の周囲をめぐって幅4mほどの周溝がある。
G 内 部 主 体	上段墳丘の頂上は土鶴頭の形を失って平坦になっている。 組み合せ式石館がここに営まれていたとみえる。
H 発 堀 の 目 的	『山形市史』編さん
I 調 査 部 分	墳丘中央部、南・西・北の墳麓部、西北部下段と西南部上下段部分。
J 立 地	山崎集落の背後にある丘陵の頂に営まれている。標高167m前後、比高32m。
K 現 状	丘陵の北端の高み(標高167mの三角点)にあるものを一号墳とし、その南100mの稜線上にあるものを二号墳とする。二号墳の丘稜線上に、もう一基あるらしいが、確認されれば三号墳とする。 昭和44年3月 一、二号墳を含めて山形市の指定史跡となった。 昭和48年6月 二号墳が県指定史跡となった。
L 発見された遺物	砥石(頂上中央部の深み) 埴輪(墳丘頂の周辺部と下段上面の周縁部)
M 年 代	形式の上では ① 丘陵の稜線上に位置する高塚であること。 ② 墳丘外面を覆って埴輪が置かれたこと。 ③ 周溝をめぐらしていること。 などの点から、古い要素を持っているといえる。 形式的には、古墳時代前期第IV期か後期第I期におくべきであろう。 実年代としては、5~6世紀とすることができよう。

### 今 次 の 調 査 結 果

同 左

昭和60年10月14日～昭和61年7月10日（※昭和60年5月 現地形と古墳群の測量）

山形市教育委員会

古墳群。一号墳一円墳 二号墳一円墳 三号墳一？

底径50m強(東西51m強、南北53m強) 高さ約5m 上段の底径40m強(南東一北西方向)  
もともと平坦な墳頂面の直径は、南北25.8m、東西23.2m 築成に要した土量 約3,000m<sup>3</sup>

埴輪は墳丘頂の平坦面周辺部、下段上面に二列、下段墳麓にもめぐる。

葺石なし。周溝幅は8m前後か(墳径の6分の1か)

中心から北へ4.25mにはば東西軸線で、墳頂平坦面からの深さ65cmの位置に、長さ4m以上幅2m  
の明瞭な土色変化が見られる。墳丘構築後に掘り込まれ、再び埋め戻されている。その調査区東壁面  
に見られる土色変化は、木棺がつぶれた後に凹レンズ状に堆積した土層とみられる。粘土構造か？

二号墳の復原整備資料を得るため。

調査は、5m間隔の測量杭を利用し、一部はトレンチで、また一部はグリッド法で面的に遺構・遺物を把握するように実施した。

墳頂は海拔165m、墳麓は海拔160m。

同 左

墳丘の北東部に繩文土器、石器。墳丘頂周縁、下段上面に二列の埴輪列。墳丘裾から埴輪。土師器  
破片(西側周溝)。

周溝覆土中の土師片があるが、微細なため型式未確認。埴輪は、官窯(アナガマ)で焼き上げられたものがみられる。また、円筒埴輪、朝顔形埴輪に加え、家形・短甲形などを象ったものや動物の埴輪もあるらしい。

東北地方の埴輪の出現と展開からして、5世紀も後葉の年代が考えられる。

がなかったかどうか問題を残す。

6 墳輪の配置…本古墳の埴輪については、円筒・朝顔形円筒・器財形を有すること、その配置については、埴輪基部を伴う据え方を明確に検出するには至らなかつたが、下段上面に配された点は確認できた。また、墳丘墳麓部に配された可能性も有するようである。なお、具体的な埴輪の配置・配列については、据え方および原位置を保つ埴輪の確認とともに、C-4グリッド等で出土した埴輪の整理により明らかになろうか。

## 2 残された課題

### (1) 周溝の確認

菅沢二号墳は、

- ① 周溝幅は、西側（G-12～14グリッド）で最大10m、北側で（M～N-7グリッド）9m、北東側（J-2～3グリッド）で5m以上と、9m前後の幅をもつことが予想される。
- ② C-5グリッド（埴輪群の多い、C-4グリッドの西グリッド）の南側は、周溝の北縁が東西に通り、この部分では、張り出しが出ることはない。
- ③ A～B-4グリッドの東西の壁面に見えた縦の土色変化は、とくにB-4グリッドのばあい、周溝の南縁をしめす可能性がある。同時にB-4グリッドの平面にも、溝内土壤の痕跡がみられる。
- ④ 墳丘南側A～B-7グリッドのうち、A-7グリッドにみられる高まりは、地山であり、周溝幅はA～B-7グリッドの東壁面の溝内土壤の広がりによって、幅6.25m以上と思われる。
- ⑤ 東南側のB-1～2グリッド内の北壁にも、溝内土壤の痕跡がみられる。その幅は、7.5mある。

以上の諸点について、墳丘の北西側の確認がないが、墳丘の平面は大凡円形であろうこと、そして墳丘の底径は、やや橢円形状で南北53m強、東西51m強である。

周溝幅は、従来考えられた一律幅4mよりは広く、しかも、西側の丘陵削り出し部分については、墳丘径の1/6（幅約9m）にちかい。これは、やや地山の高い北側でも意図されたが、地山の低い南～東側では必ずしも貫徹されていなかつたかのように観取される。ただし、南東側の現在桑畠部分については、精査を必要とする。さらに東側については、ブルドーザーによる開墾の影響も考慮する必要がある。周溝が墳麓全体を同じ幅でめぐるかどうかが焦点である。

## (2) 墳丘の形状

本来、菅沢二号墳は、整備対象の古墳としては、①「墳丘は多少の崩落土があるものの全体として当初の形態をよく保っているもの（加藤充彦1984「古墳の整備」『月刊文化財』No.251）に属する。ただし、現段階で知られていることは、その西側は、②「墳丘の平面形は比較的よく保たれているものの、墳丘自体は段々畝状に開墾されたりしているもの」にあたる。

したがって、まず始めに、周溝、墳麓線の確認に加えて、墳丘原形の確定をすべきであった。北側の、I～M-7グリッドにおいて果すつもりであった。この部分は、一部削り過ぎていた。同時に、G-1～7グリッドの整理を行なったが、墳丘の南西から西側を含んで下段上面（テラス）の確定は不十分である。

## (3) 墳輪列

埴輪列の原位置の確認であるが、C-4、5グリッドの埴輪群の大半は、崩壊土壌とともにある。これらの本来の位置が墳麓か一段目か墳頂のものか特定できない。室内整理によって確定される部分があろうか。

下段上面（テラス）については、I-4グリッドで確認できたものがあるが、これを全面的に行なうかどうか。また墳頂部や墳麓部については、以前の調査記録の分析がます望まれる。

## (4) 内部主体

墳頂のH-7グリッドに見える墓壙は、この古墳の内部主体が、割竹型木棺直葬であることを示唆する。その大きさと方向は、H-6グリッドで確認する必要がある。これ以外に、例えば墳頂南東部に、もう一棺あるかどうか、慎重な調査を必要とする。

## (5) 侵蝕による変形の見積り

周濠の平面積は約1,000m<sup>2</sup>、堆積土の平均厚さを仮に0.3mとすると堆積土量は約300m<sup>3</sup>となる。これが墳丘の全表面（平面積2,000m<sup>2</sup>、表面積との差は10%未満）から一様にもたらされたとすると、平均削剝深は、0.16mとなる。墳頂平坦面をのぞく斜面からもたらされたとするとその平均削剝深は0.2mとなる。すなわち、墳丘表面は築成当時より表土厚さだけ縮小している。この程度の流土をトレンチ断面観察からとらえることは困難であろう。



# 図 版





喜沢古墳群の立体写真（山形市道筋河川裏・昭和59年撮影、CS、1820, 21）



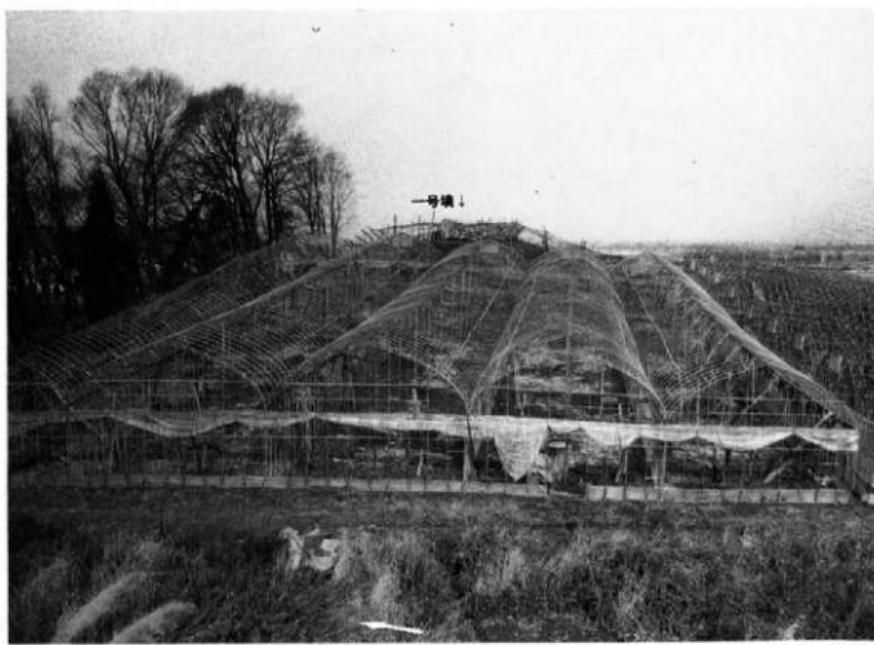
a 菅沢古墳群遠景 東より西方向をのぞむ



b 菅沢古墳群遠景 南東より北東方向をのぞむ



a 二号墳近景 北東より南西方向をのぞむ



b 一号墳近景 二号墳より北をのぞむ



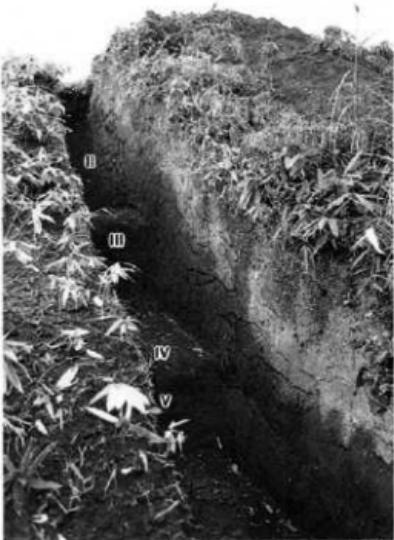
a 三号壕遠景



b 二号壕からの眺望 (山形市街)



a 東トレンチ土層断面(1)



b 東トレンチ上半部土層断面(2)



c 東トレンチ土層断面(3) テラス付近



a 西トレンチ



b 西トレンチ土層断面上半部南壁の販路層



c 西トレンチ下半部



a 南トレンチ



c 南トレンチ土層断面上半部東壁



旧表土 地山層 b 南トレンチ土層断面上半部西壁



a 北トレンチ土層断面(1)



b 北トレンチ土層断面(2)

トレンチ上部、填顶部化粧土および版築層



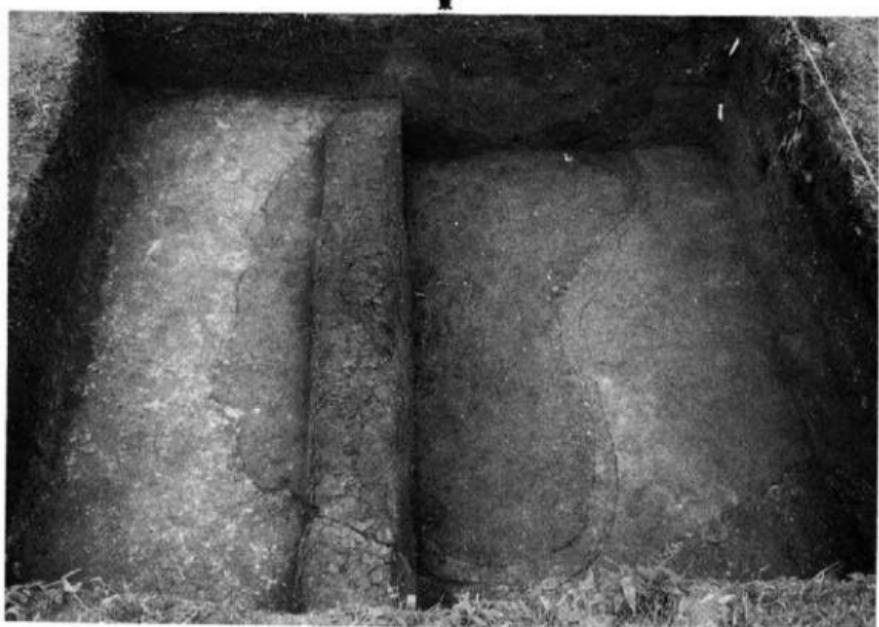
a 西側周溝部(1)



b 西側周溝部(2)

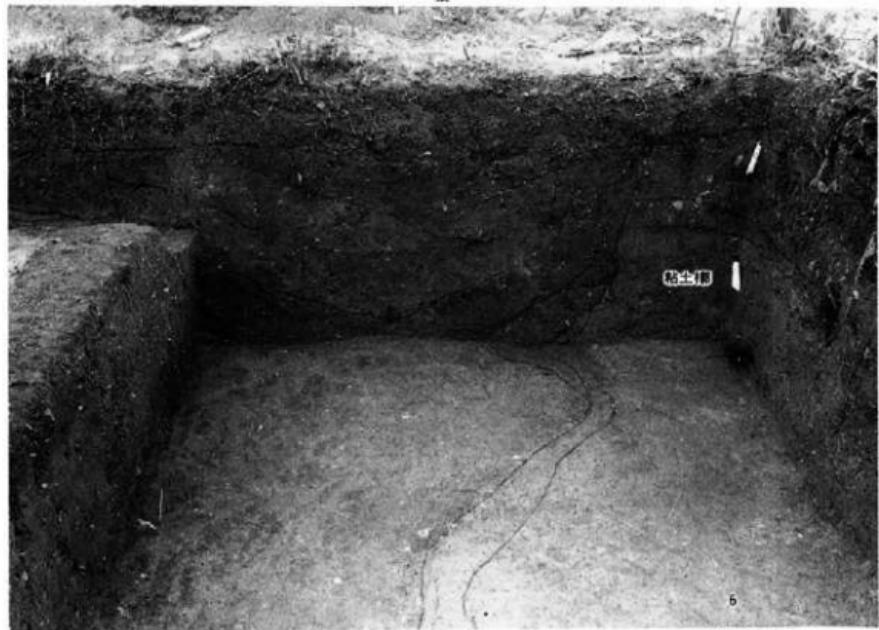


a 二号坑主体部(1)



b 二号坑体部(2)

東



a 二号墳主体部トレンチ(1)

北

中壁



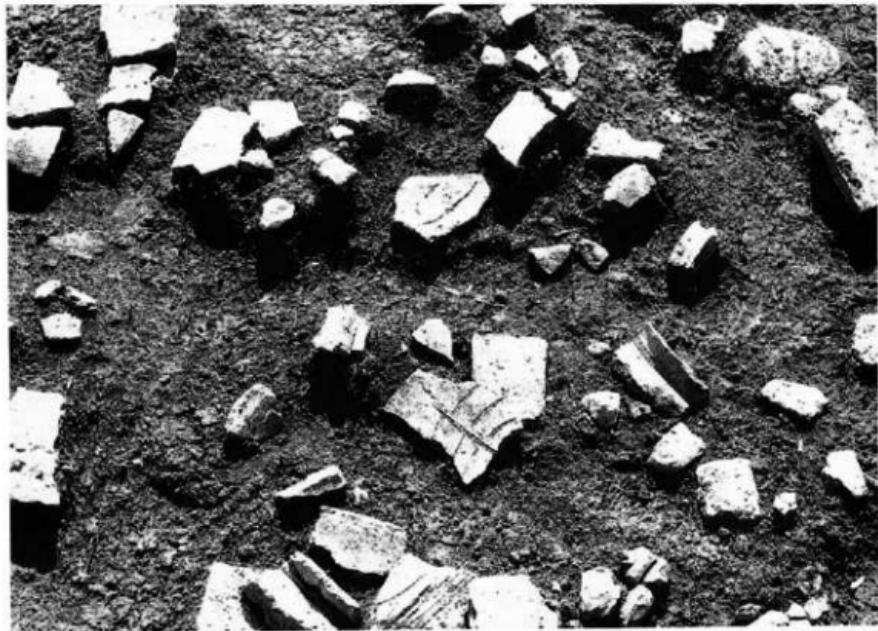
b 二号墳主体部トレンチ(2) 中壁の断面



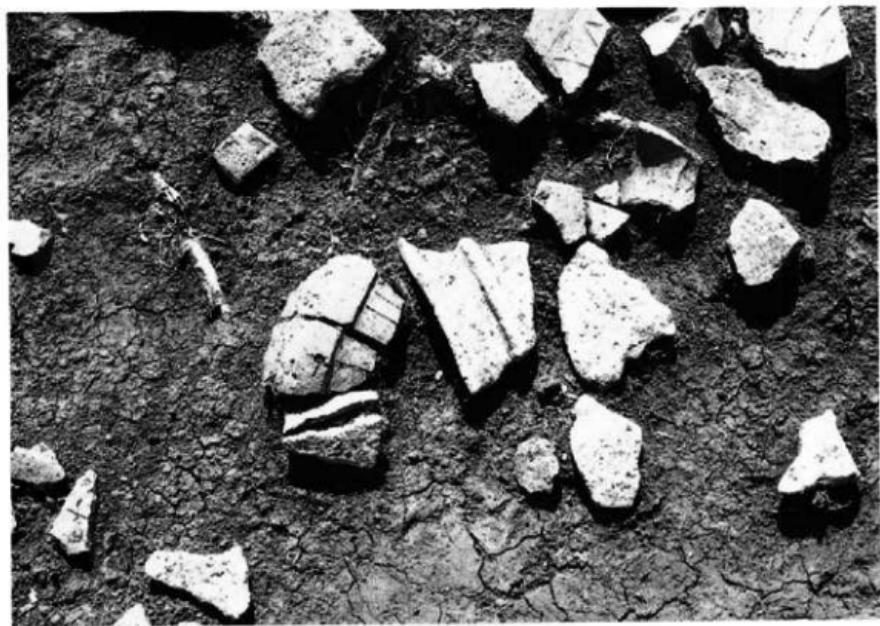
a 東南墻縁部(c-4グリッド) 墓出土状況(1)



b 東南墻縁部墳出土状況(2)



a 東南墳體部形象埴輪出土狀況(1)



b 東南墳體部形象埴輪出土狀況(2)



a 東北側テラス  
H~I-4 グリッド  
埴輪設置部



b 東北側テラス  
上縁の埴輪設置部



c 同上、掘り方

---

菅沢古墳二号墳  
発掘調査報告書

昭和62年3月25日 印刷

昭和62年3月30日 発行

発行 山形市教育委員会

印刷 梶大風印刷

---

